

い	煽		ち	い	と	っ	途	て	ん		て	か	で	て	か	で	覗	「	「	栗	そ
く	る	そ	に	る	も	っ	中	・	に	「	、	な	再	、	な	再	き	い	え	は	う
。	よ	れ	な	と	で	っ	か	し	似	少	両	と	生	両	と	生	込	え	強	強	言
栗	う	か	る	言	き	っ	ら	ま	て	し	拳	持	さ	拳	と	さ	む	つ	張	張	い
は	に	ら	か	わ	ず	っ	意	い	て	・	を	帰	れ	握	し	・	紅	っ	つ	つ	な
自	耳	少	と	れ	、	。	識	い	・	・	握	ろ	、	り	・	蘭	に	た	？	た	が
分	元	し	自	時	分	。	し	な	・	・	思	う	栗	っ	・	顔	表	な	表	膨	
の	で	の	分	。	に	自	て	の	・	・	っ	は	（	っ	・	に	情	ら	情	ら	
考	何	間	問	分	問	分	い	に	・	・	！	こ	）	！	影	を	ま	を	ま		
え	か	沈	わ	だ	れ	だ	ない	音	・	・	そ	れ	は	・	が	め	せ	・	せ		
方	を	黙	た	っ	し	っ	量	が	・	・	の	言	言	・	差	た	る	・	る		
や	囁	が	ら	ど	喧	喧	小	さ	・	・	の	っ	っ	す	。	の	？	」	」	。	
意	い	訪	ん	な	嘩	し	く	な	と	、	仏	方	が	。	“	？	」	」	」	」	
見	て	れ	気	持	した	た	な	い	思	っ	蘭	い	い	。	心	」	」	」	」	」	
が	は	、	持		相	相	い		っ		さ	い	い	。	を	」	」	」	」	」	
ま	過	風	っ		手	手			っ		さ	い	い	。	閉	」	」	」	」	」	
た	ぎ	が	っ		に	に			っ		さ	い	い	。	ざ	」	」	」	」	」	
状	去	不			似	似			っ		さ	い	い	。	し	」	」	」	」	」	
況	っ	安			て	て			っ		さ	い	い	。	し	」	」	」	」	」	
を	て	を			て	て			っ		さ	い	い	。	し	」	」	」	」	」	

独	や	見	誰		両	頷	つ	栗	「	で	も	栗	い		吐	木	「	手	小
り	っ	の	も	「	膝	い	た	は	あ	終	話	ち	つ	く	に	そ	を	さ	さ
言	て	こ	わ	わ	を	て	紅	思	っ	わ	し	ゃ	の	。	埋	う	突	な	な
の	さ	と	た	た	抱	か	蘭	わ	、	る	が	ん	指		め	だ	き	砂	砂
よ	。	し	し	し	え	ら	の	ず	い	な	心	に	摘		尽	よ	足	利	利
う		か	の	の	。	自	目	顔	え	ん	を	通	り		く	ね	を	が	が
に		言	中	中		分	に	を	。	て	向	り	に		さ	。	伸	敷	敷
ほ		わ	身	身		も	宿	け		フ	け	に	な		れ	ば	き	き	き
つ		れ	な	な		紅	る	た		エ	た	る	る		め	し	詰	詰	詰
ぽ		な	ん	ん		蘭	不	先		ア	た	の	嫌		ら	て	め	め	め
つ		い	て	て		を	安	で		じ	し	だ	だ		れ	座	ら	ら	ら
と		こ	い	い		真	感	見		や	だ	け	か		て	っ	れ	れ	れ
心		に	る	る		似	じ	つ		な	け	。	か		栗	た	て	て	て
の		う	の	の		て	、	め		い	。		栗		ち	。	。	。	。
叫		ん	は	は		腰	黙	合		け			。		。				
び		ざ	ほ	ほ		を	っ	っ		。									
を		り	ん	ん		下	。	。											
風		し	ど	ど		ろ	一	。											
に		ち	と	と		し	度												
の			。	。		、													

声の音色に明らかでないがある。赤い凜とし	「男は・・・もつと嫌い。」	思わず膝を抱える腕に力が入る。	ったわけではない紅蘭のこれまでを想像し、	しれない。雫は望んでその問題の当事者にな	その原因そのものを排除しようとするのかも	はわかるようでわからない。だからこそ人は	ぐに理解できる。しかし、その問題の解決策	複雑で繊細な問題だということとは誰でもす	て、見せびらかしてくれた方がどれだけ楽か	手に入れられないそれを持っている。誇示し	況なのかもしれない。自分がどう足掻いても	は人によつては喉から手が出るほど欲しい状	関わりたくないのに目についてしまう。それ	げで目的は達成できたんだけどね。」	高くとまってるとか噂が広まって。まあおか	関わらないようにしたの。そしたら今度はお	も、今言ったみたいなきこが起きちゃうから	「大人は一発でアウト。それから同性の子	せていく。」
----------------------	---------------	-----------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------

た声に黒い絵の具が混ざったような、恨みを
 混ぜたような声だった。
 「わたしさ・・襲われたことあんだよね
 その言葉に思わず全身に力が入る。
 「その時はたまたま誰かが側にいて、その人
 が助けてくれたの。命の恩人だと思って、そ
 れからお礼も兼ねて連絡とってたりしてたら
 さ、今度はその人に襲われたの。」
 重たい何か喉を押し広げ、痛みを伴いなが
 ら腹の底に落ちていく。こうして口にするこ
 とで蘇る恐怖を思うと、今すぐ紅蘭を抱き締
 めたい気持ちになった。
 「でも、わたしは運が良かった。ちよつと
 体触られただけでなんとか逃げ出せて、外で
 すぐ人に会えたから。けど、それからも、学
 校の先生も警察も、男には下心があるんだっ
 てわかったら信用なんてできるはずもなく
 てそれはこの空間だからどうにかなるって問
 題じゃない。あの漠空って人からは何にもそ
 ういうの感じなかったし、いけるかなって思っ

たけど。それ以前にあの人感情読めなすぎて怖すぎて。男なのか女なのかも曖昧な上にこっちちは心閉ざしてるってのに、そりゃ開けないよね。」

雫は「確かに。」と心の中で頷いた。

「そんなもんかな。ここに来た理由はわからないけど、わたしはここに来る前の自分の考えを、未だに改めることはできてない。わたしも・・・死にたいって思ってた。」

雫は美祿や雷鼠、利他に仏蘭に紅蘭と、ここに来る前はそれぞれの理由で、自分も含めて死を望んでいたのではないかという疑念を、この時に確信に変えていた。そしてそれは宿屋側の住人へと移り、そして最後に想像した番才だけが、その法則に当てはまらなかった。「これでおあいこ。でもあの人ってすごいね。わたしがぱっと見てもしかしてって感じたことまで受け取られてたもん。」

“わたしに興味津々でさあ”と得意気に語る仏蘭を抱えていた、“自分”に対しての発言

